

特集「コモンディーズの診療・最近の話題」

巻 頭 言

京都府立医科大学大学院医学研究科
皮膚科学

加 藤 則 人

医学の領域の進歩はめざましく、これまで治らなかつた疾患に対する画期的な治療法が開発され、従来の定説を覆すような病因の発見も枚挙にいとまがない。思い立って、当時必携の教科書であった医学生時代の「内科学」(朝倉書店)を読んでみると、この二十数年間の医学の進歩に改めて驚かされる。臨床医学の分野は細分化され、自分が専門とする領域の知識と技術の習得で精一杯というのが実情である。患者からは我々の専門領域以外のさまざまな身体の異常についてもコメントやプライマリケアを求められることも多いため、少なくとも各領域のコモン・ディーズについては、「専門外の分野だから分からない」と言わずに、最新の知識を update しておきたいが、学会や研究会では自分の専門以外の領域の情報を得ることは案外難しい。

本号では、「コモンディーズの診療・最近の話題」をテーマに、本学附属病院で診療に携わる各領域のエキスパートの先生方に、それぞれの分野の最新のトピックスを中心に解説していただいた。

糖尿病については福井道明先生(内分泌・代謝内科学)に、2型糖尿病の治療において、血糖依存的にインスリン分泌を促し、グルカゴン分泌を抑制するインクレチン製剤を中心に、最近の薬物療法に関する進歩を解説していただいた。インクレチン製剤は、食後高血糖を中心に改善し低血糖を生じにくいことに加え、血糖降下作用以外の多面的な作用を有し、糖尿病の合併症に対して抑制的に作用することから、糖尿病患者の長期的な QOL や生命予後の改善が期

待できるようである。現在、多数の糖尿病治療薬があり、次々に新しいものが登場するので、それぞれの特徴を整理して日常診療に活用したい。

誰でも年に数回は罹患する感冒については、藤友結実子先生、藤田直久先生(分子病態検査医学)に、抗菌薬の処方のは是非や診断を中心にまとめていただいた。特に、「いわゆる『かぜ』の主訴に紛れてしまう疾患や、発熱のみで典型的なかぜ症状に欠けるが、見逃してはいけない重篤な疾患かぜと鑑別すべき疾患」について詳しく、かつ分かりやすく解説されており、保存版の総説である。

横井則彦先生、加藤弘明先生(視覚機能再生外科学)には、これまで水分補充が中心であったドライアイの治療に、ムチンを増加させる可能性を持つ2種類の点眼液が本邦から登場し、パラダイムシフトを迎えているホットな状況について解説いただいた。

一生のうちに2人に1人が罹患するといわれる蕁麻疹については、益田浩司先生(皮膚科学)に、最近策定された治療ガイドラインの概説をしていただいた。最近では、皮膚のアレルギー疾患だけでなく、食物アレルギーや環境中のアレルギーに対するアレルギー性の喘息や鼻炎にも経皮感作が重要なことが明らかになってきたが、加水分解小麦含有石鹼使用者に近年多発した経皮・経粘膜感作によると思われる小麦アレルギーについて解説していただいた。

これらの力作が読者の皆様の明日からの診療に役立つことを願っている。